

白樺湖 夏の家

2016年に工学院大学白樺湖学寮が閉鎖され、解体を予定していた大学に「建築系同窓会が引き受ける」と名乗り出て、白樺湖夏の家にコンバージョンして早5年が過ぎた。毎年5月1日に開館し、北欧建築・デザイン文化の拠点にするべく、夏の家での講演会や合宿等の動態保存活動を続けてきたが、2020年はコロナ禍で完全休館を余儀なくされた。そんな時に幸運は訪れるものである。東北芸術工科大学の建築・環境デザイン学科の西澤高男先生より電話があり、山形の映画祭のイベントのために制作したフィンランド式のサウナ小屋の終の行き先を探しているという。幸いにも学寮の敷地は広く、夏の家は引き受けるに打ってつけの環境である。是非にお願いして到着を待った。

2020年10月31日の朝、例年なら夏の家の閉館の日、ついに待望のサウナが届く。企画設計と制作を担当した西澤高男先生と、設計を担当した廣瀬隆志建築設計事務所の廣瀬隆志さんと、ビルディングランドスケープの中村朋世さんの3人も車で駆けつけてくれた。夜中に山形から長野へと高速を飛ばしてきたトラックも到着した。荷台に乗せられたサウナ小屋を早速クレーンで吊り上げ、敷地奥の、今は使っていない除雪車置き場の前に設

夏の家に待望の サウナが届きました！

置した。この日のために取り寄せておいたサウナストーンを薪ストーブの上に積み上げ、火を起し、準備完了。白樺は周囲にいくらでもあるので、サウナの中で体をたたく白樺の若枝も用意したかったが季節的にかなわなかった。バケツと柄杓は地元のホームセンターで調達した。ストーブの温度はどんどん上昇し、フィンランドサウナアンバサダーの中村さんの合図とともにサウナストーンに水をかけ、蒸気が充満した。

敷地は軽井沢より標高が高く、10月末は晴れてはいても気温は10度を下回っていた。まず夏の家で水着になり、およそ20メートルを駆け足でサウナへ。中はすでに蒸気が充満している。冷えた体を温め、木の香りに包まれながら蒸気で潤され、至福の時間を味わった。これまでの夏の家の滞在者は徒歩10分の温泉の「すずらんの湯」を利用していたが、敷地内で本格的なサウナ体験が味わえるとなれば楽しみも格別である。

この唯一のサウナ体験をもって、2020年度の白樺湖夏の家の活動は終了した。サウナ小屋はシートで包んで除雪車置き場に仕舞い、母屋では水道管の凍結を予防するため水抜きを終えて、その日の内に閉館して白樺湖を後にした。

(鈴木敏彦)



車輪付きのサウナ小屋 除雪車置き場から引き出して使用する。



サウナ小屋内観 採光・換気のための軒スリットに照明が仕込まれている。



サウナ小屋設置メンバー 左から鈴木敏彦、廣瀬隆志、西澤高男、中村朋世。



映画祭当日にサウナを楽しむ人々

約 550万人の人口に対して約300万個のサウナがあるというフィンランド。ヨナス・バリヘル&ミカ・ホタカイネン監督のドキュメンタリー映画『サウナのあるところ』は、フィンランドの人々にとって生活の一部となっているサウナを通じた人間模様を、ロウリュ（蒸気）の立ち上がる音とともに優しく、美しく描き出している。「山形国際ドキュメンタリー映画祭でのフィンランド映画特集に合わせて、サウナ小屋を作りませんか？」訪れていたヘルシンキのサウナ「ロウリュ（Löyly）」でたまたま現地にいらしてご紹介頂いたサウナ研究家の東海林美紀氏にそう尋ねられたのは2018年9月。フィンランドのサウナ文化と、山形の温泉文化との関係を考える上でのまたとない機会を頂き、快諾した。そして翌年の夏に正式に依頼があり、映画祭の開催される2019年10月に向けて制作を開始した。

異常気象ともいえる巨大台風の中での仕上げ作業を経て公開となったサウナ小屋を設置したのは、映画祭のメイン会場である山形市民会館前の広場。半裸で小屋を出入りするには抵抗のある方が多い立地なのではないかと心配を他所に、本場のスタイルを踏襲したサウナを楽しむ方々の姿が、フィンランドから7,500kmを隔てた山形の街中に白昼夢のように出現した。

イベント後、サウナの新たな活躍の場として鈴木敏彦先生よりご提案頂いたのが、工学院大学白樺湖夏の家だった。コロナ禍のため勤務先の山形の東北芸術工科大学に行けない日々が続く、仕上げ作業に取られたのは後期授業の始まった10月初旬。白樺湖夏の家が冬季閉鎖される前に間に合わせるべく、フェノバボード貼りによる室内面断熱とシリコン系高耐候性塗料による外壁塗装を行い、今季最終日の10月31日朝に山形から450kmの道のりを経て白樺湖へと届けた。フィンランドの遺伝子を持つ山荘の前で1年ぶりにサウナのストーブに火が入り、「サウナのあるところ」の魅力を鈴木先生と工学院大学の学生たち、そして設計施工に携わったメンバーで共に楽しんだ。

晴れて「サウナのあるところ」となった白樺湖夏の家。サウナ小屋共々、末長くこの地で愛されることを願っている。

(西澤高男 東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科 准教授、ビルディングランドスケープ)

山形、そして白樺湖の「サウナのあるところ」



今 日本はサウナブームである。愛好家が「ととのう」と表現する深いリラックス感を求めてサウナを中心とした施設に人が集まり、テントサウナを使った屋外のイベントが行われている。サウナを求めてフィンランドに行くツアーもある。2020年にフィンランド式サウナの伝統はユネスコの無形文化遺産に登録された。サウナは最もよく知られているフィンランド語であろう。

一方フィンランド人にとってのサウナは日本の風呂のようなものであり、どこの家にもある当たり前の存在である。「サウナが観光資源になる」とフィンランド人に言ったところ信じてもらえなかったという話を聞いたことがある。筆者がヘルシンキでシェアして住んでいたファミリー用アパートにも当たり前のようにシャワーの隣に1~2人用のサウナがついていた。古くは出産の場でもあり、亡くなった人の体を清めるのもサウナの中であった。

中でも最もサウナが欠かせないのが、フィンランド人の多くが夏の間を過ごすサマーコテージ(夏の家)である。離れとして、湖や海の近くに建て、水風呂は無いことが多い。温まった体は外気浴のほか、湖に飛び込んだり、冬は雪の上に転がったりしてクールダウンする。リラックスし、裸で自

然と一体となるサウナはサマーコテージでの生活に欠かせない存在である。

サウナの中では難しい作法は必要ない。サウナストーンにかけてロウリュ（蒸気）を発生させる水の量も自由でいいし、我慢して熱さに耐えるのではなく、体調に合わせて滞在時間を決めていい。一緒に入った人と会話を楽しむのもいい。いつもは無口なフィンランド人も、サウナの中では少しおしゃべりになる。ただ、「サウナの中では教会の中にいる気持ちでいるように」ということわざがあり、他者への配慮を忘れないのが重要である。

夏の家とサウナ

伝統的には周りに生える白樺の木から若い枝を取って束ね、ヴィヒタを作る。水に浸して体をたたくと白樺の香りが広がり、マッサージ効果がある。

「白樺」の名を持ち、白樺の木が生えるこの場所で、アールト建築の影響が強く感じられる建築のそばにおいてもらえるのはこのサウナにとって最良であるように思う。また、サウナに入る体験が加わることにより、武藤章氏が経験したであろうフィンランドでの生活に少しでも近づけることができれば幸いである。

(中村朋世 ビルディングランドスケープ)

サウナ使用者への注意事項

- ・ ストーブとストーブ下のレンガおよび内外の煙突は非常に高温となるため、直接触れることが無いように十分ご注意ください。
- ・ ストーブ設置スペースの両脇の床にある孔は、新鮮空気の給気用のため、物を置いたりして塞ぐことがないようにご注意ください。
- ・ 高温になるため、サウナに入るときは金属のアクセサリなどは外しておきます。

サウナを使う前に



- ・ サウナストーブの上のできるだけたくさんサウナストーンを積みまします。
- ・ 小さな枝や乾燥した樹皮などを用いて着火し、徐々に大きな薪をくべて火を起こします。
- ・ 1~2時間程度薪を燃やし、サウナストーンに水を少しかけ、すぐに蒸発して蒸気が出るようになるまでサウナストーンを温めます。

サウナの入り方



サウナには裸、もしくは水着で入ります。裸で入るときは座るところにタオルや薄い布を敷きます。バケツに水を汲みます。



サウナストーンに少しずつ水をかけ、蒸気(ロウリュ)を発生させます。室内の温度を上げたいときは、ロウリュを足します。あまりたくさん水をかけると下の鉄板に水が落ちてはねるため、少しずつ水をかけます。



身体が温まるまでサウナの中で過ごします。髪が焼けるのを防ぐため、シャワーの際に軽く髪を濡らすかタオル・帽子をかぶります。



シャワーや外気浴でクールダウンします。水分補給も忘れずに。

サウナを使い終わったら



- ・ 使い終わったら、火が消えるのを待ちます。あるいは水を少量かけて火を消します。
- ・ 消し炭や灰をストーブからかきだします。
- ・ 外の煙突が十分冷えてからサウナにシートをかけ、直接雨や露がつかないようにします。
- ・ 長時間使用しないときは、屋根のあるところに移動します。

ヴィヒタ(Vihta)をつくってみよう



ヴィヒタの作り方

- ・ 30~50cm程度の白樺の枝を片手に握れるくらいの量集めます。
- ・ 大き目の枝を中央に配置し、小さめの枝を周りに配置するようにして束ねます。
- ・ 麻ひもなどで根本を縛ります。

ヴィヒタとは白樺の若枝を束ねたものです。フィンランドではサウナに入る時、ヴィヒタで身体を叩いてマッサージする習慣があります。



ヴィヒタの使い方

- ・ ヴィヒタをバケツの水に浸し、腕や背中、足などを葉の部分でたたきます。
- ・ 皮膚の血行を促進し、白樺の香りによりリラックス効果があるとされています。

山形国際ドキュメンタリー映画祭2019におけるイベントの一環として、本サウナ小屋は計画された。4日間の実施ということに加え非常に厳しい予算事情もあり、サウナ小屋としてギリギリ成立する大きさや仕様を突き詰めて考えることから設計を開始した。同時に、ほぼセルフビルドに近い状態となる施工性への配慮（施工は東北芸術工科大学の西澤高男研究室+荒達宏+中村+廣瀬）、そしてイベント広場で目につくアイコニックな外観デザインも、当然重視すべき要素であった。

結果として導き出した形は、3畳の平面形状に軒を低く抑えたシンプルな「家型」である。サウナ専用ではない非力なストーブの採用、コスト上の理由による構造用合板のみの断熱無し外装、脚立程度で容易に組み立てられるサイズ感等を考慮し、平面は小さく高さを低く計画した。構造用合板の家型エッジが強調された正面の外観等、良い意味での割り切りが、ミニマルなデザインでありつつ

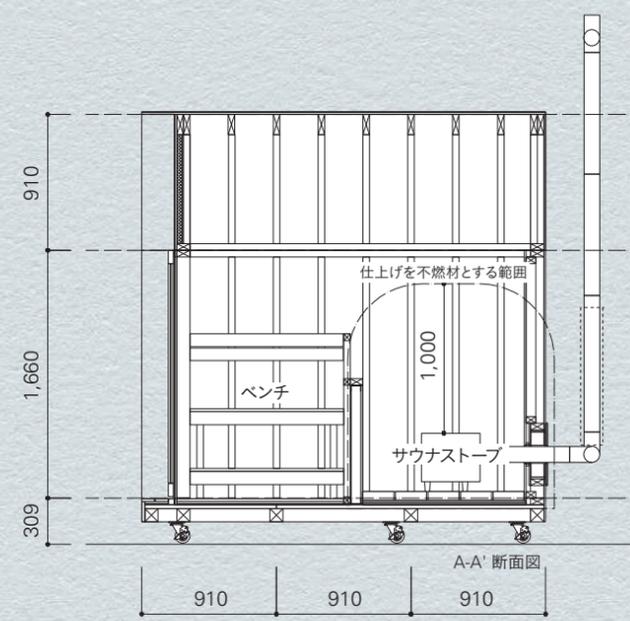
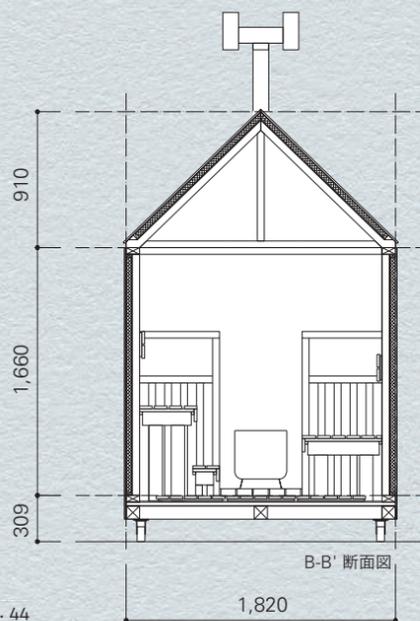
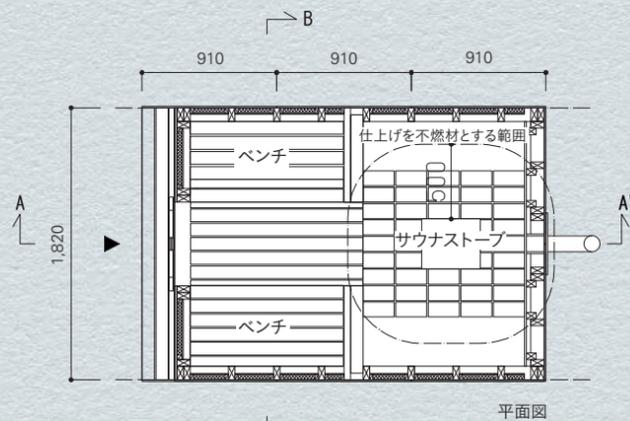
建築設計について

も愛らしい佇まいを生み出した。

木造で火を扱うことから、設計過程においては安全性に十分配慮し、県の火災予防条例への対応と消防協議を行った。結果として薪ストーブ周囲のクリアランスが必要となり、平面形の半分がストーブのための空間となった。高さ方向については、ベンチがある両サイドを低く、木材との離隔が必要なストーブと通路に当たる中央部分を高くし、低い方は床面から軒までを1.65mとした。家形の柱梁フレームは、家具に近いスケール感を意識して45×90mmの間柱材を303mmピッチで連続させた。

本場フィンランドのサウナは、その多くが豊かな環境下に置かれ、窓からは木立や湖が眺められるものだが、本イベントでは市民会館の味気ない人工地盤広場へ置かれることから、外への眺望を諦める代わりに内部空間を如何に豊かに見せるかを熟慮した。

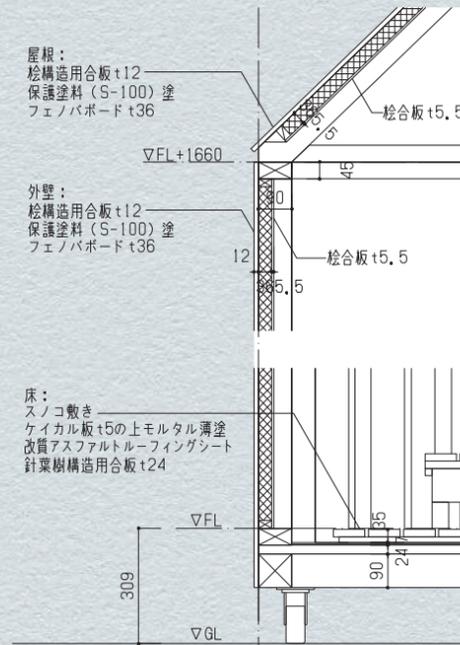
使用する木材樹種はあえて単一にせず、線材と



床材を山形県産の杉、面材を静岡県産のヒノキ合板とすることで、自然な形での色分けを行った。視線が集まるストーブの直下床には、協賛である株式会社クラフトクレイン社製の重厚な風合いの素焼きレンガを張り、ストーブ背面壁は（モルタル塗り経験ゼロの筆者による拙い）黒塗りとし、視覚的な奥行きを与えた。内部における最大の特徴は、屋根と壁の際に設けたスリットである。暗い室内に差し込む間接光が生み出す光と影のグラデーションは、どこことなく非日常性を感じさせる効果を生み出している。

日本中に大きな被害をもたらした台風19号の影響を直に受けたことから、工事も映画祭のイベントの開催も遅延し、サウナ小屋の稼働自体が2日半になってしまったが、多くの方々に無事楽しんで頂くことが出来た。イベント後しばらくは東北芸術工科大学構内に保管して頂き、コロナの影響が弱まった2020年の夏に白樺湖の家への移設再利用に向けた補修工事として、断熱材の設置と外部合板への高対候性塗装を行った。当初はイベント後のサウナの利活用方針が決まらずに始まったプロジェクトであったが、フィンランドにゆかりがあるという、これ以上無い安住の地をご提供頂き、関係者の皆様には心から御礼を申し上げたい。

（廣瀬隆志 廣瀬隆志建築設計事務所）



東北芸術工科大学での断熱・外壁保護追加工事

【基本情報】

施設名：白樺湖の家 / 工学院大学旧白樺湖学寮
所在地：長野県茅野市北山29
主要用途：フィンランドの巨匠アルヴァ・アールトに学んだ唯一の日本人建築家で工学院大学教授であった武藤章先生（1931-1985）が設計した建築の動態保存を目的に、主に北欧の建築とデザインに関する講演会やワークショップ等に活用する。「白樺湖の家」を拠点に、北欧の暮らしに啓発活動を通じ、白樺湖活性化に貢献したい。



断面図

会員募集中

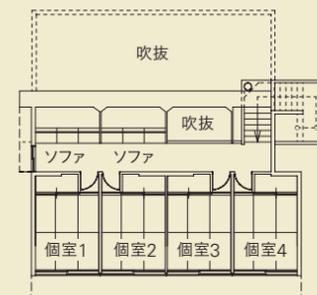
「建築を保存する会」

本建築を保存する活動を支援し、維持管理に協力する校友の会。入会時寄付金は300,000円、維持協力金は12,000円/年。現在の会員数は20名。入会金は改修工事費等の原資となった。会員には「白樺湖の家」の鍵が与えられ、まるで自分の別荘のように利用することができる。会員は広く校友と教職員から募集する。会員の同伴を条件に、だれでもいつでも夏の家を利用することができる。教員が入会し研究室のゼミ活動等で有効活用することを期待している。利用スケジュールは「建築を保存する会」が管理する。

企業会員募集中

「建築の保存を支援する企業の会」

本建築を保存する活動を支援し、維持管理に協力する企業の会。入会時寄付金は500,000円、維持協力金は120,000円/年。建築の保存をサポートする企業として建築系同窓会が表彰する。企業会員は本建築を企業研修、企業主催のイベントに利用できる。本学学生を対象とするイベントについては、建築系同窓会が全面的に支援する。



2階平面図



1階平面図